

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

リスク回避のために、山岳保険に加入しよう

高校山岳部の活動を始めるにあたって、生徒には（もちろん保護者にも）、自然を相手にする以上山岳部の活動にはリスクが伴うことをきちんと説明をしなければならない。そして、最低限の責任と義務を明確にしておくことはいうまでもないだろう。そのための「山岳保険への加入」は必要最低限の条件である。保険に加入するということは、金銭的な安心を得ることに加え、山へはいるに当たって気持ちを引き締めることにもつながり、「心がけ」の上でも大きなお守りを得たことにもなる。結果として事故を減らす一助ともなりうるだろう。

池田工業高校の山岳部の顧問として活動を始めるにあたり、僕は顧問・生徒の全員に、以上の説明をした上で、日本山岳協会（日山協）の山岳共済会の「山岳遭難・捜索保険」に加入してもらった。ちなみに僕自身は信高山岳会を通して保険に加入済みなのはいうまでもない。日山協が年額 3000 円（当時）の「高校山岳部」向けの保険を始めたことは、以前「かわらばん」（No.130、2005.02.25）で紹介した。その年の千葉インターハイの専門委員長会議の席で日山協の田中会長が、日山協としてこの保険を作った意義を説明されたことも記憶にある。この時は、「高校生にもはいいりやすい価格とそれで補償できる金額を検討した結果」ということで、積雪期の登山への対応など若干不十分な部分もあったが、それまでの状況から考えれば画期的なとりくみであった。

その後、保険業法の改正があったため、現在では当初とは内容も仕組みも変更されてきているので、ここで改めて制度を説明し、加入を呼びかけたい。もちろん、今は他の民間の保険も出ているからそちらへの加入でも構わないわけだが、僕自身長山協の理事長であるという立場からも、この日山協の山岳保険を勧めたい。いずれにしても無保険で山へ引率するようなことがないようにしたいものである。

というわけで、以下日山協の山岳保険について説明する。まず、この保険は「日本山岳協会山岳共済会」が契約者となる団体傷害保険であるため、保険加入には、「日本山岳協会山岳共済会」の会員になる必要がある。会員になるとはいっても、これは便宜上のことで、高校生および 18 歳未満は 500 円、それ以外の方は 1000 円を払えば誰でも会員になれる。これは毎年更新しなければならないので、結局のところこの入会金も含めた金額を「保険料」と考えればわかりやすい。年度の中途での加入も可能であり、加入した月により保険金額は減額される。

保険には「山岳登山コース」と「軽登山コース」の大きく分けて 2 つの種類がある。「軽登山コース」は、山岳登山用具を用いなくても対応可能な登山中の捜索・救助活動に対する費用が補填される。ただし、人工壁による事故には対応している。一方、「山岳登山コース」は、日本国内において、登山用具を用いない登山（軽登山）はもちろん、アイゼン・ピッケル等を用いた登山（山岳登山）中に遭難した場合まであらゆる登山の、捜索・救助活動費用が保障されるほか、死亡後遺障害については国内・国外を問わず保障される。入院・通院等の費用をつけると金額的にはやや高くなるが、この部

分を外した設定であれば、最低で年額 3560 円という設定 (S タイプ) がある。僕は、池工の山岳部の活動として、すでに 5 月の針ノ木でのセンター講習会への参加や山スキー、また岩場でのクライミングも考えているので、そのあたりを保障してもらえるかどうか、山岳共済会に電話で問い合わせしてみた。結果「軽登山コース」は基本的には夏山を中心とした登山が想定されており、残雪期の登山なども対象外となってしまうとのことであった。したがって通年活動しようと考えている池工山岳部としては、「軽登山タイプ」での加入は想定外ということになった。ただし、できる限り生徒への負担を減らしたいと考え、検討の結果 S タイプでの加入を生徒にも義務づけることにした。これだと死亡後遺障害 100 万円、遭難捜索費用 100 万円、賠償責任 1 億円が保障される。

これらの詳細については、日本山岳協会山岳共済事務センターに問い合わせれば丁寧に説明してくれるほか、申込書も含めた書類一式をすぐに送ってもらえる。以下に連絡先を記載するので、未加入の学校はまず資料を請求の上、ご検討下さい。

取り扱い先：日本山岳協会山岳共済事務センター (月～金 10:00～17:00)

〒170-0013 豊島区東池袋 3-7-11-707 電話 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

岳沢定着、快適な雪稜登攀



今年のGW (2日から4日) は、信高山岳会のメンバーとともに岳沢にはいった。前オーナー上條岳人さんの不慮の事故と雪崩による小屋の喪失以来、「岳沢」にはきちんとした山小屋がない状態が続いていたが、今年の夏に向けて槍ヶ岳山荘の穂苅さんが山小屋の再建をすすめており、仮小屋でのビール販売も始まっていた。かつてのGWの岳沢の賑わいにはほど遠い状態だったが、それだけに逆に静かな山を楽しめた。3日にはご同輩として、カシタシ主峰でのパートナーでもあった田中広樹さん、長山協の仕事をともした赤田幸久さんがCCAメンバーとともに入山してきて、テンションもあがった。

さて、肝心の登山の方は入山日は雪訓、3日は奥穂南稜へ、4日は誰も行ったことがないというだけの理由で間ノ沢に入った。今年の岳沢は雪もまだたっぷりであり、天候に恵まれ素晴らしい登攀となった。南稜にとりついたのは20数年ぶり。メンバーは

松田、久根、そして小生の3人である。下部のハイマツと藪は雪に覆われ、トリコニーは岩もしっかりとしており、南稜の頭までは取り付きから3時間の快適な登攀であった。静かな奥穂高山頂からは、目の前のジャンダルムはもちろん富士山までも望め、至福のときであった。下山は吊り尾根から奥明神沢へと辿ったが、南稜の快適登山と比較してむしろ手強いのは、こちらであった。雪が堅くアイゼンの爪も立たない斜面の下降にはやや肝を冷やした。結局前穂までたっぷり2時間半かかった。

岳沢の初心者コースといえば西穂沢、ついで奥明神沢などが挙げられるが、間ノ沢は不遇である。今回も他のコースにはトレースがあるものの、ここだけはノートレース。こちらは沼田女史も含めた4名で登った。天狗岳を越えて天狗の科尔回りで下山したが、こちらも稜線歩きが核心部であった。

